

え、先輩と一緒に住んでるの？ 嫌じゃない？？

その種の質問はあまりにも久しぶりすぎて、赤葦は一瞬答えに詰まってしまった。

二、三年前は似たようなことをうんざりするほど訊かれた。

先輩といつも一緒にいるの嫌じゃない？ 面倒じゃない？ うざくない？？

赤葦の答えは常に同じで簡潔だった。

『別に』

面倒じゃないわけでもなく、うざくないわけでもないのだが嫌ではない——、なんてことを細々説明するのはそれこそ面倒だったので、色々諸々まとめての「別に」であった。

大学に入学して約一ヶ月。友人なのか、学籍番号が近いから必修の講義でよく顔を合わせるだけの知人なのか、いまだ微妙なところの男子学生数人に、赤葦は久々の答えを口にして渡した。

「あ……別に。平気だよ」

当たり前だけどそれぞれ個室があるんだし、とも付け加えたが、実はこれはちよつとだけ嘘だ。

それぞれに個室があるのは本当だが、たとえ一部屋しかなくて毎日が合宿大部屋状態に

なったとしても大して嫌ではないと知っている。根っからの体育会系気質が幸いしてか（災いして、なのかもしれないが…）先輩と長時間過ごすことが苦にならないのだ。

あとはその先輩の人柄によるところが大きいんだろう。

人徳があつて一緒にいると癒される……のとは真逆で、いつもうるさいしガサツだしすぐしよぼくれる『面倒くさいの権化』のような人だが、不思議と一緒にいるのが苦痛ではない。赤葦のパーソナルスペースはどちらかと言うと人より広い方で、その人のパーソナルスペースはほぼゼロだ。自分とその人の性格だけみたら水と油で合いそうもないのに、なぜか……馴染むのだ。バレー漬けだった高校時代、部活の先輩であつたその人と問題もなくやつてきた。

（いや、問題もなく、どころじゃねえな）

とても上手くやつていた、というのが正しい。

自分はセッター、その人はエーススパイカー。ポジション的にもセット扱いされがちではあつた。加えて彼は主将、自分は副主将であり、主将である彼が「チームを鼓舞する」という最大にして最重要役割以外の細々したことは全部赤葦にお任せであつたから、変な気を遣わずに自分の好きにできて却って楽だつた。

しかし、赤葦の『答え』に対するまわりの反応やその後のやりとりも、昔も今もあまり

変わらない。

「俺は絶対イヤだわー……。無理」

「まあ普通は嫌だろうね。俺は慣れてるから平気なんだと思うよ」

「へー」

結局、あの面倒くさい彼と一緒にいても苦痛じゃない理由なんてはつきりはわからない。そんなことを考えること自体がすでに面倒だ。

ただ、今ここに彼がいたとしたら、きつと自信満々に言うのだろう。「だって、俺と赤葦は相性ばつちりだから♪」と。

認めるのは甚だ、非常に、とんでもなく不本意なことではある（そして何故か悔しい）が、ようはそういうことなのだ。

机の上に時計代わりに出しておいたスマホが、ピコンとメッセージの受信を告げる。

タイミングがいいのか悪いのか、送信者もメッセージの内容も確認するまでもなくわかるから笑ってしまう。

それを、「彼女？」と訊かれたのが驚きだった。

「え、違うけど。なんで？」

「なんか嬉しそうだったから」

「嬉しいんじゃないくて可笑しかったんだ。今ちようど話してたその先輩からだったから」
「でも今赤葦、相手確認してないよな？」

「あー……」

高校の時であつたら、授業が終わつてすぐに赤葦へ『部活へ行こう』とメッセージを送つてくる人物が誰かなんて説明はいちいちしなくて済んだのに。

「俺にメッセージを送つてくるの、その人ぐらいしかいなんだよ」

色々省略して答えたなら、なんだか妙に気の毒そうな目で見られてしまった。

「あ、いや、友だちがいけないわけじゃなくて……」

弁解してみても、彼らの表情から憐憫の色が消えない。

（ああくそつ。これは絶対木兎さんのせいだ！）

話題の人物、木兎光太郎にちよつと理不尽な悪態を胸中で投げつけながら、赤葦は「もう練習に行くから」と逃げるようにその場を離れた。

梟谷学園はスポーツ強豪校で、他の高校と比べても運動部の練習施設はかなり立派な方だったと思う。しかしこの大学の練習施設は梟谷の比ではない。バレーボールだけでなく、

陸上競技や水泳、バスケットボール、テニス、バドミントン等々、インカレ常連の種目をたくさん抱えた大学らしく設備は充実している。もちろんバレーボール専用の体育館があつて、その大きさはコートが四面とれるほどだ。

ただ一つ難を挙げるならば、その大きくて新しくて立派なバレー専用体育館は、講義棟から激しく遠いということだった。

木兔に連れられて初めてその体育館を訪れた時、構内移動用の自転車かバイクは持ち込み可能ですか？ と真顔で訊ねてしまった赤葦である。

「地下鉄の一駅分はゆうに歩くからな……」

キャンパス内をのろのろと縦断（と言ってもいいだろう）しながら赤葦は独りごちた。

赤葦が練習着に着替えて体育館に入っていくと、すでにアップを始めていた木兔が目ざとく赤葦を見つけて寄ってきた。こんな広い場所で、体育館の入口は何箇所もあるのに、赤葦は大声を出しながら体育館に入ってきたわけでもないのに、だ。

「お疲れ様です。……っていうか、いきなりなんなんスか？」

赤葦の顔を見るなり、挨拶もなしで木兔は赤葦の体を抱き締めたのだ。

周囲から一斉に、「また始まった……」的な失笑含みの視線が送られてくる。

「赤葦、疲れてるだろ」

「はあ、そりゃ疲れてますよ。高校と違って講義の一コマが長いんですもん、大学って。教授が喋ってることも意味不明だし。眠気を堪えるのに苦労します」

「そーゆーことじゃなくてー」

赤葦と木兔の様子をそばで見っていた先輩部員が笑いながら木兔を揶揄う。

「ボクトゥ、おまえが一番赤葦を疲れさせてるんだろー。あんまり世話かけんなさ」

赤葦がバレー部に入部して一ヶ月足らずだが、すでに部員たちは木兔と赤葦の関係をしっかりと把握していた。バレーで推薦入学し、一年次からエース候補として目立っていた木兔が、赤葦が入部してきたその日から「赤葦、赤葦」と連呼して高校時代と同じように接しているのだ。そりゃ把握されるもする。

「違いますって！ 赤葦が疲れてるのは顔を見ればわかることで！」

「毎日疲れてんだよなー、木兔の世話で」

「まあ、そうっすね」

「赤葦までそういうこと言う!!」

赤葦は特に人見知りでも人嫌いでもないが、木兔のようにコミュニケーションの塊でも

ないので、新しい環境に入ればそれなりに気疲れもする。バレエ部内では木兔がすでに赤葦の馴染みややすい空気を作ってくれていたので、余計なことに神経を使う必要もなくバレエに集中できているが、さっきのようなバレエとまったく関係のないところでの人間関係の構築には少しだけ苦労していた。

新入生なら誰でも抱えているであろう些細なストレスだが、木兔はそれを敏感に察してケアしてくれようとしているのだ。衆人環視の中での突然のハグという、些か強引で乱暴なケアではあるが。

（アニマル・ヒーリング、みたいなの？ つまり、ボクトさん・ヒーリング？ まあ木兔さん、かなり動物的だからな）

などとちよつと失礼なことを考えつつ、木兔の背中をポンポンと軽く叩き、「もう平気ですから」と小声で伝えた。

ほんの数分のハグで、心の疲労感は薄れている。『ボクトさん・ヒーリング』は意外にも効果があるのだ。……絶対言わないけど。

赤葦の背中にまわっていた木兔の腕の力が緩んだ時。

「もう離してあげなさいよ、ぼっくん。赤葦くん困ってるじゃないの」

三年の女子マネージャーが、クスクスと笑いながら木兔の肩を叩いて通りすぎていった。

聞き慣れない呼び名が、赤葦の耳の内をざらざらと撫でながらこだましている。

「……………ぼっくん？」

「なに？」

なんの違和感もないですって顔をして、木兔が目の前で小首を傾げた。

（いや…………。「なに？」じゃねえだろ…………）

*

光太郎、光太郎くん、光ちゃん——。

歴代の木兔の彼女たちの「呼び名」パターンはだいたい三通りだった。

「ぼっくん、は新しいパターンだな」

木兔の新しい彼女が木兔をどう呼ぼうが、本来赤葦には関係ない。関係ないが、彼女ができたか否かは少しだけ関係がある。木兔のメンタル強度が高校時代と大して変わっていないければ、破局と同時に大しよぼくれ期に突入するからだ。それほど長引きはしないのだが、試合中や練習中のバレーに関してのしよぼくれよりも扱いに気を遣わなくてはならない。バレーに関してのしよぼくれであったなら（ギャラリーが少ないだの試合会場が小さ

い等の不満も含め……) 時には放置し時には煽って、と赤葦以外のメンバーたちもわりと対処法を心得ていた。が、恋愛絡みのしよぼくれの場合、その状態から浮上させることができるのは赤葦だけ(通常の三倍赤葦に纏わりつくので)、という厄介なものだったからだ。

(でも、一年間は俺がいなくても平気だったわけだし。だいたい俺と知り合う前だって平気だったわけだし)

赤葦が大学に入学してくるまでのこの一年、忙しいふたりを繋いでいたのは主に某スマホアプリのメッセージである。しかし木兔本人から不調や不満のメッセージを受け取ったことはないし、まわりからも木兔の深刻な不調の噂を聞かされたことはない。

そもそも赤葦と木兔が同じチームでプレーしていたのは二年間だけだ。赤葦とコンビを組む前から木兔はすでに全国区のエースだったし、全日本の強化候補選手に選ばれるようになったのも大学に入ってからだ。赤葦がそばにいたわけじゃない。

(そうなんだよ。あの人はもともと、いろいろちゃんと自分でできる人なんだよ)

梟谷当時のレギュラーメンバーたちからは、赤葦がそばにいなくなったらどうするんだと揶揄されていたが、卒業したあと赤葦に送られてきた大学バレーでの愚痴らしきメッセージは『女マネが作ってくれるスポドリが薄い……』だけだった。

「つまり、彼女はついに木兔さん好みの濃さのスポドリをマスターして、木兔さん攻略に成功した末の『ぼっくん』なわけか」

……ああそうですか。

そう考えたら、諸々のことがどうでもよくなった。

「めんどくせー……」

愚痴を零しつつ、部屋に戻るなり倒れ込んだベッドの上で寝返りをうつ。

(もうこのまま寝てしまおうか……)

今から食事をして、風呂に入って、洗濯して……と、寝る前にやることを頭の中で列挙したら、面倒くさいモードに拍車が掛かった。帰り際にコンビニで買った食べ物は明日の朝食に回して、風呂も朝シャワーを浴びればいい気がする。

しかし、赤葦のヤル気ゲージがほぼ『睡眠』に傾きかけたその時、空腹を刺激する美味そうな匂いが漂ってきて閉じかかっていた瞼が開いた。

「カレーだ……食いてえ……」

一度そう感じてしまったらもうダメだった。このままおとなしく眠りになんかつけるわけがない。

確かレトルトのカレーがあったはず。レンジでチンするレトルトのごはんもあったはず

……。と脳内アカアシが記憶を探る。

でも！ 違うんだ。ダメなんだ！ 今俺の欲しているのはレトルトのカレーじゃなくてこのいい匂いをさせている鍋で煮込んだカレーなんだ！ と胃袋アカアシがきゅうきゅうと抗議してくる。

「んなこと言っちゃってしかたねえだろ……」

と独りごちたら、ローテーブルの上に置いてあったスマホがピコンとメッセージの受信を知らせた。

『カレー食う？』

同居中のフクロウからだった。またまたタイムリーである。

でもなんで部屋に直接呼びにこないんだろう？ と思いながらスタンプを秒で送り返す。土下座しているフクロウのスタンプだ。

食いたいです、カレー……。

切実さはばっちり伝わったらしい。数秒後にキッチンの方から大きな笑い声がして、同時に『早くおいで』のメッセージも届いた。

「赤葦くんにも、とても残念なお知らせがあります」

赤葦が自室を出るなり木兎が神妙な顔で言ってきたので、よもやカレーになにか一大事が?! と赤葦は気色ばんだ。無表情の下で。

「なんスか？」

「なんとということでしょう……福神漬けを買ってくるのを忘れました……」

「いらねっス」

「なんで?!」

「俺、どっちかつつーとラッキョ派なんスけど、なくても特に困りません」

「ジーザス……」

頭を抱えた木兎が、膝から床に崩れ落ちている。

「それより木兎さん、さつきゆで玉子二個買ったんですけどカレーに入れますか？」

「俺、温タマ派……」

「入れないっすか」

「入れないとは言っていないじゃん！」

福神漬けだろうがラッキョだろうが、ゆで玉子だろうが温タマだろうが、多少好みが変わっても、結局ふたりにはなんの問題もないということだった。

共用の冷蔵庫は、ふたりの体格と食事を考慮して、一緒に生活を始める際に木兔が使っていた単身者用サイズのものからファミリー用サイズに変えた。主に飲み物と出来合いの惣菜しか置いていない「赤葦スペース」に比べ、「木兔スペース」には野菜や肉などの『食材』が入っている。実家を出て一ヶ月の赤葦と、一年と一ヶ月の木兔の差がここに出ている。最初はやはり木兔も外食やコンビニの弁当ばかりだったらしいのだが、すぐに飽きて、今では週末や時間のある時に作り置きをするというマメさである。高校時代、部屋のロッカーはガラクタで溢れていたのに、ベンチの上には脱いだ練習着、ジャージ、サポーター等々を置きっぱなしにしていたのに。今では使用済みのタオル一枚すら赤葦との共有スペースであるリビングに放置したりしない。ちなみに先日木兔の部屋を覗いたら、雑然とはしていたものの散らかり放題な汚部屋ではなかった。

（木兔さんも成長してるんだよなあ……）

またちよつと失礼なことを考えつつリビング中央のローテーブルにつく。

「赤葦、今俺にすげー失礼なこと考えてたぞろ」

木兔がカレー皿を両手に持ったまま赤葦を見下ろしている。

「考えてません」

「おまえなー、自分で思ってるよりいろいろ顔に出てるからな？」

「まじすか」

昔からの友人にも、親からも、いまだに「表情が読めなくて怖い」だの「もっと思ったことを顔に出しなさい不気味だから」と散々なことを言われているのに？

「えーと……、たとえばどんな風に出ています？」

「口じゃ説明できないけど。なんとなく」

ああ、動物的勘でなんとなくか……と、ちよつとホツとした。だって、自分の考えていることが他人に丸わかりなんて嫌すぎるし。ましてや木兎にまで丸わかりとか、千鳥ヶ淵に身投げしたくなるほどに嫌すぎるし。

というか、なんとなく困る、のだ。

どう困るのは自分でもよくわからないけれども。

「あ、今考えたこともわかった」

「……なんすか」

「ンなことはどうでもいいから早くカレーよこせ？」

「当たり前すね」

他愛ないお喋りはそこで一旦中止して、ふたりともまず空腹を満たすことにした。

木兔のカレーは、ゴロゴロと大きいままの具材をルーと一緒に鍋にぶっこみました！
というのが一目でわかる、本人の性格同様大雑把なものだ。味は昔キャンプや学校の給食
で食べたものと似ている。

でもとても美味しい。

食べたいと思った時に食べる物が一番美味しいのだと実感した瞬間である。

欠食児童のごとくモリモリと食べ進める赤葦を見て「まだいっぱいあるから」と木兔が
苦笑いする。

「赤葦、帰りにコンビニで食うものたくさん買ってたからさー、カレーはいらないかなー
とも思ったんだけど」

「……あれは明日の朝食になりました」

梅・鮭・昆布のおにぎり三つに肉野菜炒めや唐揚げ等、赤葦が夕飯用に買ったラインナ
ツプはどう考えても朝食には重い。それで木兔も色々と察したようだった。

「まあ、腹が減ってても部屋に戻るとレンチンするのも面倒って時あるよな。わりやり寝
ちやおうとしてた？」

「カレーの匂いに阻止されましたが」

「パワーつけたいならメシはちゃんと食えよ。支度が面倒なら俺が手伝うし。時間がある時、作り置きのおかず、一緒に作ろうよ」

「……………えーと、木兎さんが先輩に見えるんですが」

「先輩だよ?!」

「そうでした。すっかり忘れてました」

「あかあし、かつわいくない〜!」

「一応、百八十二センチありますしね」

軽口の応酬をしながら食事の時間は楽しく進む。

ふたりでいると、だいたいがいつもこんな調子なのだ。何気に楽しくて、たまに発動する彼の面倒くささも帳消しになる。

そして腹も膨れ、また他愛のない会話をしている最中だった。

ソファアの背凭れ側のリビングの壁に、ドスンとなにかがぶつかつたような音がした。

隣りの部屋とは対称の間取りになっているので、隣室のリビングの壁になにかが当たつたということである。

「……なんでしょう？」

赤葦は振り向いて背後の壁をじっと見つめた。木兎も黙って壁を見ていたので、自室のリビングがしばし無音になった。

たとえばこちらの話し声や笑い声が大きすぎたとか、物音が響いて迷惑だったとか、それをこちらに注意するために壁を叩く場合もある。まあ、百パーセントそれはないだろうがと思いつつ、一応、ふたりして耳を澄ませていたのだが。

壁をドンと叩くというよりは、小刻みになにかがトントンと当たっているような音が続いている。

こちらを注意しているわけでもなさそうだし、なんだろう？ と赤葦が不思議に思っている、木兎がなにかに気づいたのか、呆れたように天を仰いで溜息を吐いた。

「木兎さん？」

「あー……、無視してりゃいいと思う。気になるならテレビでもつける？ 音大きくしてたら紛れ——」

『あ……ん、ああんっ！』

木兎の言葉に被さるように、場違いな女の高い声が壁の向こうから聞こえてきた。驚きで、思わず手に持っていたコーヒークップを落としそうになる。

「え……………これっ……て」

夜とはいえ、深夜ではない。まだ遅い夕食をとっているか、テレビを観て寛いでいるぐらいの時間帯だ。それ以前にここはリビングで、その類の音が聞こえて相応しい場所でもない。いやいやそんなことよりも、こんな声を隣りに聞かせること自体がどうなんだ、という話である。

「……聞こえてないと…思ってるんですかね？」

「さあな。あんまりそういうこと気にしない質なんじゃねえの。この時間にリビングでやり始めるぐらいだから」

「ていうか木兔さん、あんまり驚いてないみたいですけど、こういう声が聞こえてきたりするの、初めてじゃないんですか？」

「んー、俺の部屋側、向こうは寝室にしてるみたいでさ。たまに夜聞こえてくるよ」

寝つきはいいし眠りも深いから、起きている時に聞こえてこなければ特に問題はないよ、と木兔は苦笑いしている。

「いや……そういう問題じゃないですよ。これはちよつと非常識すぎます。明日、管理会社に連絡しましょう」

赤葦が眉間の皺を深めて話している間にも、甲高い女の嬌声は続いている。居た堪れな

い。

「まあ、このマンション、単身者用じゃないし。カップルでの入居可だし、こういうこともあるだろ。お互い様かな」

「は？」

「いや、こっちだって彼女を呼ぶこともあるだろうし」

「でも、だからって……」

「赤葦の部屋側は大丈夫だと思っけどさ。まあ、彼女を部屋に呼ぶ時はこういうことにも気をつけなきゃならないよっていう教訓、みたいな？ あ、赤葦が彼女を呼ぶ時は言ってくれば俺は出かけるようにするし」

木兎の言葉にまるでトゲが生えているように、あちこち引っ掛かりながら赤葦の耳を通っていく。

『こっちだって彼女を呼ぶこともあるだろうし』

つまりはそういうことだ。

木兎には今、そういう対象がいる。

それをはつきりと突きつけられて、思った以上の動揺が赤葦の胸を圧迫している。

「……今のところ、俺にはそういう予定ないんで」

「あ、うん…、そっかー」

眉根を寄せて俯く赤葦を木兎がどう思ったのか、わからない。いつも通りの、頭の固いやつだと、ノリの悪いやつだと呆れただろうか。

高校時代の『彼女』と、部屋にまで呼ぶ現在の『彼女』では、受ける印象も重みもかなり違う。

木兎さんこそ、マネージャーさんを呼ぶ時は俺に遠慮なく言ってくださいね。…：そんな風に軽く返すことは、とてもじゃないけどできはしなかった。

夕飯が済んで風呂に入る前の時間は、だらだらとふたりしてリビングで過ごすのが常だった。

しかし今夜は、あんな声を聞きながら同じ空間で顔を突き合わせていることなどできるはずもなく、お互い早々に自分の部屋に引っ込むことになった。

赤葦にとっては、気まずいを通り越してなにかの拷問のように思えたが、さつきあの場にいたのが赤葦以外の誰かであったら、木兎はただの笑い話としてあっさり流したのかもれない。自分たちの年頃の間では、下ネタなど日常的に話されているからだ。

積極的に話に加わったりはしないが、聞くのも苦手なのだといノセントぶるつもりは赤葦にもない。

ただ、木兔とするその類の話は妙に生々しく感じてダメだった。

「風呂はいろ……」

今日一日で色々なことがありすぎた。消化しきれずに腹の底に溜まった澱のようなものを、冷たいシャワーでさっぱりと洗い流してしまいましたかった。

灯りが消え、今は静かなリビングを通って廊下に出る。風呂が使用中でないことを鍵の色で確認して扉を開けようとした時、風呂場と洗面所の向かい側の木兔の部屋のドアが開いた。

「あ、木兔さん風呂使います？ だったら俺はあとで——」

言い終える前に、木兔の腕が赤葦の体を捉えた。ぎゅうつと、強く。

木兔が突然抱きついてくることは珍しくない。とはいえ、さっきのようなことがあったあとで、なんの意識もせずにおとなしく抱き締められていられるほど自分は図太くなかったらしい。

ぎしぎしと軋む音が鳴りそうなほどに、体は不自然に固まった。平静を保とうとする意識を裏切って跳ねる鼓動が木兔に伝わっているかと思うと気まずい。

バレーの試合中なら、どれだけ切羽詰まっている状況でもわりと冷静に頭は働くのに。ポーカークフェイスも崩れないのに。普段の生活でも、それほど動揺しやすい質でもないはずなのに。

「あの、木兔さん？」

「赤葦は……平気？」

なにがと訊かなくても、さっきの出来事を指しているのはわかる。

「びっくりは……しました」

「俺は、ちよつとダメみたい」

「え」

「前に聞こえた時は平気だったんだけどな。今日はちよつとダメだった。近所走って頭冷やそうと思ったんだけど、やっぱり赤葦に触るほうが落ち着く」

「そう……ですか」

自分だけが過剰に意識してしまっているのかと思っていた。でも、木兔も平気なわけではなかったのだ。ふたりして、隣人の色と熱にあてられてしまった。

木兔の体がいつもより熱くて、匂いが強くなっている。木兔の熱が伝染して赤葦の体温も上がる。鼓動もますます激しくなる。息が苦しい。

まだ酒に酔う感覚は知らないが、こんな感じだろうかと思う。頭の芯が痺れて、くらくらして、足元はふわふわと覚束ない。

赤葦に触るほうが落ち着く、と木兎は言った。なのに、その言葉に反してかなり落ち着きがなくなっている部分が赤葦の下腹に当たっている。体を少し離そうとしたら、抱き締める腕の力が強くなって、逆にソコをぐっと押しつけられた。

「木兎さん」

軽く咎めるように名前を呼ぶと、木兎は悪びれもせずくすくすと笑った。吐息が耳に掛かって擦りたい。全身の肌がぞわりと粟立ち、腹の底にまた熱が溜まる。

「これは生理現象」

「俺に触ったら落ち着くんじゃなかったんですか？」

「それとはちよつと意味が違うもん」

「どう違うんです？」

「んー……、口で説明するのは難しい。っていうか、赤葦も勃ってるね」

これだけ密着しているのだ。赤葦の体の変化も当然ながら木兎にばれてしまっている。

「……わざわざ言わなくていいです」

「なんで勃ってるの？」

「だから、わざわざ——」

「あんな声聞いて、赤葦も興奮した？」

「……………」

それだけでは、ない。誰かの嬌声が聞こえただけで、ここまで落ち着きがなくなるほど初心でもない。

じゃあ、なぜ？

理由はもうわかるけれど、気づいてしまったけれど、木兔には教えたくないし——、知られたら困る。

「木兔さん——」

木兔の首に腕をまわし、耳元に唇を寄せる。

このまま廊下で、ふたりして突っ立っていても仕方ないから。そう自分に言い聞かせるように。

仕方ないですよね？ と木兔に同意を求めるように。

赤葦は一つ小さく息を吐いた。

「どうでしょうか？」

その瞬間、木兔の纏う欲の色と匂いが、ぶわりと強く濃くなった。

「っ……ふ……っ」

「あかあし……そこ、強くこすって……」

木兔に言われた通り、鈴口の部分を親指で捏ねるように強めに擦る。ぬめり気が増して滑らかに動く指先と連動して、がちがちに硬くなった木兔の幹の部分がびくびくと震えた。耳に掛かる木兔の吐息も荒い。

(かわいい……)

煮えた頭でぼんやりと思う。

初めて見る、そして触る他人の勃起した性器はかなりグロテスクで、可愛いなんて形容が相応しいとはとても思えないものだ。サイズ的には可愛いどころか凶悪とも言える。それなのに、自分の手の中でひくつく木兔のソレは可愛いかった。輪を作った手で幹の全体を揉むように扱くのに、指先で括れや裏筋を引っ搔くのに、ソレは素直に反応して、赤葦に「気持ちいい」を伝えてくれる。そして同時に、赤葦にも同じ快感を与えてくれる。木兔が、赤葦の手の動きをなぞり、赤葦のペニスを弄っているからだ。

「これ……きもちいいの？ すき？」

根本から括れままでを一気に扱き上げ、手の平で亀頭を包み込んでくると刺激する。

「んっ……ん」

夢中になって同じように手を動かしながら頷く。無意識に腰が揺れて、木兎が小さく笑ったのがわかる。

最初は機械的に、淡々と、手を上下させているだけだった。気持ちよさが増してくるにつれて理性の籠が緩くなり、本能的にいつも自分でするように動かすようになった。

「赤葦はいつも、そうするの？」

そう訊かれ、羞恥でいっぱいになりながらも手を動かし続けたら、木兎も同じように赤葦に触ってくれた。気持ちよくて息が乱れた。

廊下で、男ふたりが下半身を剥き出しにして、夢中になって相手のソコを弄り合っている。滑稽で恥ずかしい行動だとわかっているのに止まらない。

「ぼくとさ……ん」

足に力が入らなくなつて、背後の壁に凭れた赤葦に覆い被さるように木兎が立っている。赤葦はもう、与えられる快感を受け止めるだけで精一杯で、いつの間にか木兎の性器に手を添えるだけになってしまっていた。

「あかあし……だいじょうぶ？」

赤葦のこめかみや耳元に口づけを落としながら木兎が訊く。木兎の肩口に埋めていた顔を上げ、ゆるりと首を横に振った。

「そっか。じゃあ、ここ、触ってるだけでいいから」

重ねあわせた木兎と赤葦の性器に手を添えさせ、その上から木兎が大きな手で包むようにまとめて握る。木兎が腰を前後に揺らすと、ふたりの手の中でお互いの性器がずりりと擦れ合った。射精感が一気に膨れ上がる。

「……………さんっ」

「ん？ もう出る？ イキたい？」

まともな言葉がもう口から出てこない。木兎の名前を呼んで何度も頷いて答えた。

木兎が手を上下に動かしながら、腰を突き上げる動作を繰り返す。赤葦も一緒になつて腰を揺らし、木兎のペニスに自身を擦りつけた。頭の中は真っ白で、達くことしか考えられなくなった。脛の裏で光がチカチカと明滅する。

「あっ…あ…もうっ…」

「イッていいよ。いっしょに…イこ？」

「んっん…っっ！」

硬く大きく膨らんだふたりの性器が同時に弾けて、手の中に熱いぬめりが広がった。

(なに……やっつてんだ……)

赤葦は頭を抱え、廊下の壁に凭れて座り込んだ。

その隣りに木兎が並んで座り、深く俯く赤葦の顔を覗き込もうとする。

「あかーしくーん？」

赤葦が呆然としている間に、手にべったりはりついたアレも下半身のソレも、木兎が手早く処理をした。精通したての小学生男子か、と我ながら呆れる。

いや、今問題なのは後処理のことじゃないだろう――。

「……しばらく放っておいてください」

「なんで？」

「……………」

「あー、あれか。ケンジャタイム？」

木兎の能天気な言い草に、赤葦は殴りたくなる気持ちをぐっと堪えた。

「……………わかってるならなおさら放っておいてください」

「はいはい」

それきり木兔は無理に話し掛けてはこなかったが、ふたりが同時にくしゃみを連発するようになるまで、ずっと、赤葦の隣りで黙って座っていた。

* * *

大学のバレー部は、隔週土日が完全なオフである。今日はそのオフ日であるが、木兔は前日の金曜から、月一で召集される全日本候補選手たちの強化練習に参加していない。その日を見計らって……なのか、某ハンバーガーチェーンのモーニングメニューを二人前携えた木葉秋紀が、オフを存分に満喫すべく布団の中で惰眠を貪っていた赤葦を、けたたましいドアベルで叩き起こした。……という流れから、やはり木兔の不在を見計らったの偵察なのであろう。

「ぜんっぜん……笑いごとじゃないんですけど」
赤葦が事の顛末を話し終えるなり、木葉が腹を抱えて床に転がり爆笑し始めた。もとも

と細い目が糸のようになって、そこから涙まで流しての爆笑だ。隣人は朝早くから出掛けたようで、多少笑い声が外に響いたところで迷惑になりそうもないが、真剣に話したことを冗談のように笑い飛ばされているのが納得いかない。

顔を顰めて黙り込む赤葦を尻目に、一頻り笑って喉でも渴いたか、ほとんど氷が溶けて薄まっているであろうアイスコーヒーを一息に飲み干して木葉はのたまった。

「問題なく平和にやってみよう。安心したわ」

「どこが問題なく、ですか。問題大アリでしょ」

「いや、隣りのやつがヤツてる声ってのは問題だけど、その件は管理会社に伝えて注意してもらったんだろ？」

「それは……そうですけど」

例のことがあった翌日、早速マンションの管理会社に苦情の連絡をした。すぐに注意がいったらしく、あれ以来隣りからの「夜の迷惑な騒音」はなくなった。もちろん木兔の部屋でも聞こえなくなったらしい。

——が、今はそこから別の問題が発生して赤葦の頭を悩ませているのだ。ただ、そちらの方を木葉に言ってしまうわけにもいかなくて、今日の話は「隣人の嬌声事件」に対する赤葦の愚痴ということで片付けられてしまいそうなのだが、それはそれで文句が言えない。

「木兔が赤葦に迷惑掛けまくってたらどうしよう、って心配してたからさ、俺ら」

俺ら、というのは木兔が梟谷で主将をしていた時代の三年レギュラーメンバーのことである。進学先はそれぞれ違うし、すでに競技バレーをやめた者もいる。それでも、いまだに頻繁に集まって騒ぐほどには皆仲がいい。

そしてこの木葉は、赤葦が梟谷バレー部に入部する前の「木兔係」だったこともあってか、木兔と赤葦両方の相談役となっている。木葉本人は相談役など「嫌だ、やめたい、面倒くさい」と常に訴えているが、文句を言いつつ結局最後まで親身になって話を聞いてくれるのだ。大変貴重な人物である。

「迷惑は……掛けられてません」

例のこと以外は——、と胸中で付け加える。

「まあ、まだ一ヶ月ちょっとですけど、部屋を散らかすことはないし、ゴミ出し当番も忘れてません。洗濯物を溜め込むこともないですし。食事はそれぞれが自分で用意するって約束ですけど、木兔さんが準備してくれて俺が分けてもらうことも多いです」

「ふうん」

「心配していたわりにはリアクション薄いですね」

「まあね。そういう日常生活についてはもう、おまえと一緒に住みたいって木兔が言い出

した時点で死ぬほど注意してるから。一つでも守れないなら、二度と赤葦に会えないように俺たち全力で木兔の邪魔する、とも言ってるし」

初めて聞く少々過激とも思える内容に、赤葦は目を瞬かせた。

木兔と赤葦は同じ大学で同じバレー部であるから、二度と会えないようにするのは不可能かもしれない。が、彼らがもし団結したら、本当に木兔とは必要最低限の接触しかさせてもらえなくなりそうな気がした。それぐらいはやりかねない。

大学はもともと実家から通うつもりで、通える距離だった。実家で親の目を窮屈に感じたこともない。掃除、洗濯、洗濯、食事の支度など、実家にいれば自分でしなくてよかったことをほぼ自分でしなくてはならない。赤葦にとって、正直実家を出るメリットは特になかった。

それなのに。

『ふたりで住んだ方が広くていいとこ住めるし、得だし』

大学の合格がわかってすぐ、賃貸情報誌を開いて見せながら「一緒に住もう」と言った木兔に、深く考えもせず頷いてしまったのは赤葦だった。

自分がお気楽に返事をしたその裏で、そんな約束がされていたとは。

「先輩、頼もしいです」

というか若干薄ら寒いというか……だが。

「もつと言って！　つていうのは冗談だけど気づくの遅えんだよ赤葦」

「はあ」

過激ではあるが、それだけこの先輩方に可愛がられているのだとポジティブに考えることにする。

しかし。

「で？」

赤葦がキッチンから持ってきたグラスの麦茶をまた一気に半分ほど飲み干し、木葉がおもむろに切り出す。

「で？　……とは？」

「おまえの今日のその歯切れの悪さはなんでなの？」

「歯切れ……悪いですかね？」

「そんな風に訊き返すこと自体が、おまえにしてはおかしいじゃん」

木兔の存在が強烈すぎて忘れがち、そして隠れがちだが、木兔以外の元鼻谷レギュラーメンバーも十分にクセが強い。さすが猛禽類、動物的勘も、木兔同様鋭いのだ。

誤魔化すのは早々に諦めた。

「隣のアノ声を聞いた日から、木兔さんが俺に触るんですけど——」

「ぶつぶおっつ……げほっ」

木兔のスキンシップが激しいことは高校時代から木葉も知っている。つまり、今赤葦が口にした『触る』は通常のスキンシップ以上の『触る』であつて、不健全な意味を持つ『触る』なわけである。

麦茶で盛大に噎せている木葉にティッシュの箱を手渡し、赤葦は淡々と続けた。

「その日は、ああいう声を聞いてアテられちゃったのかな、まあ若いし仕方ないかな、とも思ってたんですけど」

「仕方がないのかよ……」

「あの日だけじゃなくて、あれから頻繁に触られるようになりまして……、っていうと木兔さんが一方的に俺に触ってるように聞こえるかと思いますが実際は俺も触ってます、つまりお互いのちんこを触り合——」

「ちよ、ちよと待て赤葦、ストップ、もういい。ていうかちんことか言うの止めなさい」
ほとんど涙目になりながら木葉が窘める。

「木葉さんが言えって言ったんじゃないですか」

「そこまで生々しく言えとは言つてない。概要をサラッと話せてことだろうか」

「めんどくさいなあ。ちんこぐらい誰だつて言うでしよ」

「言うけど！ おまえの口から聞きたくないっていうか、おまえの口から聞くと木兔とのアレコレが頭に浮かんで生々しいんだよ！」

「変態ですか木葉さん……」

「おまえが言うな！」

とりあえず木葉の要望で、オブラートに包みながらあの夜からの出来事を話すことになった。

と言つても、『セックスはしていませんがお互いの性器を触り合うようになりました。ちなみにほぼ連日です』と言うだけなので、五分も掛からず赤葦の話自体は終了した。オブラートに包むもくそもない。直球である。

「で」

「で？」

「結論から言うと全部おまえ次第ってことなんじゃないの」

話せと言うから話したくないことを話したのに、なんだそんなことか——とでも言いたげに、実にもなげに、木葉は言った。欠伸でもしそうな呑気な口調であった。

木兔と赤葦のアレコレを想像したくない、と言っていたから、あえての傍観者ぶりの

かもしれないが。

「嫌なら嫌だって言えばいい。おまえが嫌だって言ったら木兎は止める。絶対」

「はあ」

それは木葉に言われるまでもなく赤葦にもわかる。

赤葦が嫌がることは、木兎はきつと、絶対にしない。

「で、嫌じゃなかったら——、まあそのまま続けてりゃいいんじゃないんじゃねえの」

「それで……いいんですかね？」

お気楽すぎではないかと赤葦は首を傾げる。

「悪いことしてるわけじゃねえんだからいいだろ、別に。だからおまえ次第だって言うてるだろ。嫌なら止める、嫌じゃなければならそのまま放っておけ。木兎がどう考えているかは俺の口から言うことじゃねえし。知りたかったらおまえが直接本人に訊け」

「はあ……」

木葉の言っていることは、当たり前で尤もで正しいことだ。それは赤葦にもわかっているけれど、わかっているからといって、言われた通りにできるかどうかはまた別問題であった。

『あ、言い忘れてましたが、木兎さんには彼女ができたみたいです』

木葉が部屋を出たあと、思い出した追加情報を送った。

数秒後。

『そっちの方が大問題じゃねえか！』

というメッセージとともに怒りのフクロウスタンプが連続で送られてきた。

「え……、そうなのか？」

同性の先輩と後輩が抜き合うことと木兎に彼女ができること、どちらが重大な問題なのか、さっぱりわからなくなった赤葦である。

木葉理論からすると、同性同士で性器を触り合うのはそれほど問題ではないらしい。

同性愛が悪いことだとはもちろん赤葦も思っていないが、『特別な情』が絡まない場合のそういった行為はあまり推奨されるべきものではないと思っっているので、木葉はきつと、赤葦よりも数倍リベラルな考えの持ち主なのだろう。

そして、赤葦よりもリベラルなその木葉からしても、『木兎の彼女』は問題だということこ

とだった。

いや、違った。木兎の彼女が悪いのではない。

彼女のいる身で赤葦に触れる木兎に問題がある、ということだった。

「で、彼女のことを知って流されてる俺にも問題があるってことなんだ」

少しだけ弁解してみたことをするならば、赤葦と木兎の間で『特別な情』がまったく絡んでいないわけではない。

その『情』が一方通行で、双方向になりえないから救いがないだけで……。

「めんどくせえなあ……」

こうやって、ぐずぐずと考え込むこと自体が自分らしくなく鬱陶しい。

『嫌ならやめろ』と脳内の木葉が言う。『あいつには彼女もいるんだし』と念を押しながら。

「嫌……じゃねえから困ってます」

『じゃあ続ければ？』と脳内の木葉が欠伸をする。『あいつには彼女がいるけどな』と付け加えつつ。

「だーかーら……」

この繰り返し、何度目だよ。と脳内の自分に突っ込みを入れた時、コンコンと部屋のだ

アがノックされた。

昼前に強化練習から戻った木兎は、昼食をとって、身振り手振りを交えて一頻りバレエの話をして、仮眠をとりにも自室に行った。

そして数時間後、赤葦に『例のお誘い』をかけてきている。つくづく欲望に忠実な男だと思ふ。

赤葦の手を引いて部屋から連れ出し、先にソファに座った木兎が、にこにここと屈託のない笑顔を見せながら自分の膝を叩いた。

この顔を向けられると、ほんのついさつきまで体内を埋め尽くして赤葦を悩ませていた黒い靄つきが、一瞬で薙ぎ払われてしまう。

結局この誘いには抗えないのだ。

木兎の肩に手を置いて膝に跨る。口から出てくるのは形ばかりの抵抗。

「まだ明るいですよ……」

「でももう夕方じゃん」

「リビングで？」

「赤葦が声を我慢すれば隣りには聞こえないでしょ」

「声なんか……出しません」

「えーっ、いつも出してないと思ってるの？」

「……………」

正直あの最中のことはよく覚えていなくて、赤葦は気まずく目を逸らした。

ただ射精させ合うだけなのに、自慰としていることは変わらないのに、いつも頭の中が真っ白になってしまっただけなのに、自分がどんな状態なのかわからないのだ。

「うそうそ、ごめん。隣りに迷惑になるほどじゃないからへーキ！」

「……………」

朗らかに言っているが、フォローにもなにもなっていない。結局迷惑にならない程度には赤葦が声を出しているということ、やっぱり頭を抱えなくなった。

「あかしー……？」

甘えるように名前を呼ばれる。

膝に跨がっている赤葦の顔を見上げる木兔の金色の瞳は、すでに煮詰まったように欲の色が濃くなっている。試合中、敵の三枚ブロックをもともせず、相手コートに会心のスパイクをぶちこんだ時もこんな風に傲慢で強い瞳を見せる。この瞳に捉えられると赤葦の体温はぐつと上がる。木兔の興奮が伝染するのだ。ぞくぞくする。この感覚は嫌いじゃな

い。

しがみつくように木兎の首に腕をまわすと、木兎は赤葦の胸に顔を埋め、鼻先でその尖りを探り当てて弄った。

軽い戯れのような愛撫に吐息を漏らしたら、シャツの下に潜り込んで肌をまさぐり始めていた木兎の手がぴたりと止まった。

「なあ赤葦、おまえちよつと体熱くない？」

「そりやそうでしょ。こんな時に少しも熱くならなかったら逆におかしくないですか？」

「いや、そうじゃなくて。熱、ないか？」

眉間に皺を寄せて赤葦を見上げている木兎と視線を合わせ、赤葦も首を傾げた。

「……そういえば少し、体が怠い気がします。……風邪かな？」

ゆうべずっと冷水シャワー浴びてたから……と小声で呟くと、木兎はぎよつとした声を上げた。

「なんの修行だよ、それ?!」

修行、と言われればその通りかもしれないなかった。冷水シャワーを浴びなければならぬほど、この時季の夜はまだ暑くない。

「ちよつと、モヤモヤしてたので」

主にあなたのこと、は腹の中で付け加えた。しかしこの男は、妙なところで鋭い動物的勘を働かせるくせに、こういう嫌味には腹立たしいほど気づかない。

「……ぎゅうって、必要だった？」

「木兎さんは強化練でいかなかったでしょ。……それに最近はだいたい、こういう流れになっちゃうじゃないですか」

黙って抱き締めてくれるだけの『ボクトさん・ヒーリング』は、もうなくなったのだ。意外にもあれにかなり癒されていたことを、赤葦も今実感していた。

「う……、ごめん」

「別にいいです。……すっきりさせてくれるんでしょう？」

続きを促すように体を密着させ、木兎に笑いかける。

実際は赤葦が今一番すっきりさせたいのは別のことなのだが、それはそれ、誘われれば赤葦だってソノ気になる。……だって嫌ではないのだから。

しかし木兎は、赤葦の体をいともあっさりと引き離れた。

「なに言ってるの。しないよ」

「えー？」

「えー、じゃないです。ほらおりて。あつたかくして寝てなきやダメだよ」

「……その気になったのに」

「なにこどもみたいなこと言ってるの」

「こどもはこんなコトしたくならないでしょ。だいたい、今だって木兔さんが誘ってきたんじゃないですか」

いつもいつも欲望のまま無遠慮に触れてくるのは自分のくせに。赤葦が触って欲しい時は触ってくれないのか、と腹が立った。赤葦の体調を気遣つてのことだとわかつてはいるのに、木兔の拒絶が、なんだかとても理不尽に思えた。

風邪のせいか思考がふわふわし始めていて、言うこともやることも理性的ではなくなつてきている。

「そりやそうだけど……つて、赤葦、ダメ、止めろつて！」

木兔の股間に、スウェットの上から直接刺激を与えようとしたら手首を掴まれた。

そんなに嫌か、とムツとして、ふて腐れたように木兔の膝からおりる。

「ああ、風邪うつると困りますもんね。どうもすみませんでした」

「そういうことじゃなくて、あかあ——」

自室に戻ろうと踵を返した赤葦の腕を木兔が掴んだ時、インターホンが鳴った。

このまま言い合いを続けていたら、今言うべきでないことまで口にしてしまいそうで、

一瞬でもふたりの意識が別の方に逸れてよかったと思う。

木兎の手を少々乱暴に振り払ってインターホンに出る。

しかし受話口から流れてきたのは、赤葦が今一番聞きたくなかった声だった。もともと苛々と波立っていた気分が一気に大時化になって、放り投げるように木兎に受話器を渡した。

「彼女さんです」

「は？ 誰の——って、おい待て赤葦どこ行くんだよ?!」

木兎の制止も聞かずに自室へ戻り、スマホと財布だけを手にして逃げるようにマンションを飛び出した。

ふらりと入った近所の公園は、休日ではあるがすでに夕方なので人影がまったくなかった。

もう六月も近いというのに、うす曇りのこの日はジャケットなしでは肌寒く感じる気温だ。もともと微熱があるような体調だったから、悪寒がどんどん酷くなっている気がする。「なーんで俺が出てこなきゃならねえんだよ」

マンションのエントランスに在るであろう彼女の姿さえ目に入れたくなくて、赤葦は正面のエレベーターを使わず、外階段を使ってあの場所を離れた。

木兎に出て行けと言われたわけではないが、あのまま部屋に残っていられるわけがなかった。木兎と木兎の彼女が、あの空間で一緒にいるところを目の当たりにして平然としていられるとはとても思えない。たとえ各々の部屋にいたとしても同じことだ。赤葦の意識はどうしたってふたりの方に向いてしまう。

休日に恋人が恋人の部屋を訪れる――、それがごく一般的で自然なことなのだとはわかっている。でもあの部屋は、あの空間は、木兎と赤葦ふたりのものだ。特別な空間なのだ。たとえ木兎の恋人であっても、無遠慮に侵して欲しくない。

「まあ、むこうが優先なんだろうけどな……」

赤葦がどんなに嫌だと訴えたところで、恋人の意見が優先されるに決まっている。

木兎が恋人を庇うところなど見たくもないし、そもそも赤葦が、恋人を部屋に入れないで欲しいなどと木兎に言えるわけもなかった。

「俺はただの後輩で、ただの同居人なんだし」

当たり前のことを再認識して、ひとりで勝手にダメージを食らっている。

小雨がぱらついてきて赤葦の体を濡らす。濡れた部分からじわじわと体温が奪われ、腹

立たしさと惨めさに拍車が掛かった。

(実家、戻ろうかな……)

今日だけでなく、ずっと。

今日みたいなことが、これからも度々あるんだろう。たとえあの女子マネージャーと別れたとしても、新しい恋人ができればまた同じことの繰り返しだ。こんなことがあるたびに、赤葦の胸は軋み、腹の底には醜くて嫌なものが積もり積もっていく。

このまま公園にいても仕方がない。とにかく一度実家に戻ってゆっくり考えようとベンチから腰を上げた時、手にしていたスマホが着信音を鳴らした。

ディスプレイで相手を確認して、一瞬迷って——、受話ボタンをタップする。

『赤葦、今どこにいるの？』

赤葦が一言を発する前に、受話口から木兔の優しい声がした。

「……じつかです」

『なんでそんな嘘つくの。赤葦が出て行ってからまだ十五分ぐらいしか経ってないよ？』

赤葦の実家、ここから一時間はかかるじゃん』

「いまから帰ろうと……おもってたんです」

『なんで？』

「なん……で……」

必要な物を取りに行くでもなんでも、理由はつけられたはずだ。けれど、やっぱり適当な嘘は口から出てきてくれなかった。その代わりに、咄嗟に出てきたのは胸に一番引っ掛かっていることだった。

「……マネージャーさんは——」

『もういないよ。ていうか最初から部屋には上げてないし』

「……なんで」

『上げたくないから。ここは赤葦と俺の部屋でしょ。他の人間入れたくない』

「でも……かのじよ……呼ぶって」

『そんなのがいたらね、呼ぶかもしれないけど。いねーもん。ていうか彼女なんか作るわけないでしょ。赤葦がいるのに』

「……………おれ……？」

どうして赤葦がいたら彼女を作らないのか。素直に意味を受け取れば、彼女よりも赤葦がいいから、赤葦がいれば彼女は必要ないから、だろうか？ そんなに都合よく受け取っていいのだろうか？

「なんで？ おれ……？ そんなわけ、ない」

『なあ赤葦、さつきからなんか口調おかしいよ。熱上がってない？ とにかく早く帰っておいで』

「やです」

『やです、つて。体調酷くなったらどうすんだよ』

「おれの……たいちようは、ぼくとさんにはかんけないです」

『関係ないわけじゃないじゃん。赤葦、ほんと今どこにいるの？ 俺迎えに行くから教えて』

「こなくていいです。……かお、みたくな——」

『赤葦』

柔らかかった木兔の声音が、一瞬で鋭いものに変わった。木兔が普段他人に向かって、それも赤葦に向かって、声を荒げることはほとんどない。

『場所？』

聞き慣れない厳しい声音に気持ちが竦み、素直に居場所を口にした。

木兔を怒らせるのは怖い。木兔に嫌われるのが怖い。嫌われたくない。

「……………こうえん。いえの、ちかくの、こうえん」

『すぐ行くからそこにいろ。動くな。わかった？』

今、木兔の顔を見たくないと、心の一部が愚図っていたのも本当だけれど。それを宥めたのは、やはり、柔らかく戻った木兔の声だった。

「……ぼくとさん……」

『なに』

「さむいです……すぐく……さむい」

電話の向こうで、木兔がばたばたと動いている音がする。玄関のドアを開け閉めして、外階段を下りている音がする。外階段を使う方がエレベーターを待つよりも早いからだ。木兔の荒い呼吸も耳に響く。

急いで自分の所に来てくれるのだと思ったら、嬉しくなって、切なくなつて、泣きたくなつて、どうしようもなくなつた。

「ごめん……なさい」

『なにが』

「うそ、つきました」

『うん？』

来なくていいなんて嘘だ。顔を見たくないなんて嘘だ。早く来て欲しいし、顔が見たい。

赤葦がそれを言葉にしなくても、木兔お得意の動物的勘で、ちゃんとわかってくれているようだった。

「ぼくとさん」

『うん。大丈夫。すぐ行くから。待ってて』

電話を切ってからどのくらい経っただろうか。

ぼんやりと見つめていた公園の入口に木兔の姿が飛び込んできて、赤葦の胸の内に安堵と喜びが広がった。

張りつめていた気持ちの糸が緩む。体の力が急速に抜けていくのが自分でもわかる。

そして。

その場にくずおれそうになった自分を支えてくれた木兔に、「遅い！」と理不尽な悪態を吐いたところで意識が途切れた。

*